様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３５３０８
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ２４１８３

研究課題名（和文）潜在ランク理論を活用したエビデンスに基づく作業機能障害支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of an evidence-based occupational dysfunction support program utilizing latent rank theory

研究代表者
寺岡　睦（Teraoka, Mutsumi）

吉備国際大学・保健医療福祉学部・講師

研究者番号：６０８４６１０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、医療者を対象に作業機能障害の重症度に対応したエビデンスに基づく支援プログラムを開発することであった。結果として、効果的・非効果的な作業を整理した作業機能障害支援プログラムが作成され、それを活用し、対象者に作業機能障害支援プログラムのプレテストと本試験を実施することができた。本試験では、作業機能障害の数値の改善、主観的健康感や幸福感の改善が見られた。また、この作業機能障害の改善効果はフォローアップ期にも継続していた。これにより、予防的作業療法で使える作業機能障害支援プログラムが開発できたと示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、医療者を対象に作業機能障害の重症度に対応した予防的作業療法のためのエビデンスに基づく支援プログラムが開発できた。作業機能障害支援プログラムは、健康や幸福に関連する作業を生活に取り入れる方法が記載されており、医療者がセルフヘルプで作業機能障害の改善に貢献できる可能性がある。さらに、作業機能障害支援プログラムでは、医療者へ実践できたことから、医療者の作業機能障害の改善と予防に作業療法士が貢献できると期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop an evidence-based support program for healthcare providers that corresponded to the severity of occupational dysfunction. As a result, an occupational dysfunction support program that organized effective and ineffective tasks was developed and utilized, and a pre-test and main study of the occupational dysfunction support program were conducted with the subjects. This test showed improvement in the numerical value of occupational dysfunction, as well as improvement in subjective health and sense of well-being. In addition, this improvement in occupational dysfunction continued during the follow-up period. This suggested that a program to support occupational dysfunction could be developed for use in preventive occupational therapy.

研究分野：作業療法

キーワード：作業機能障害　プログラム開発　作業療法介入　予防的作業療法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

予防的作業療法では、医学的な疾患・障害をもたない人々を対象に作業機能障害を評価し、改善に向けて支援するアプローチであり、健常高齢者を対象に発展してきた。しかし、予防的作業療法では労働者の作業機能障害の改善が整備されていない。作業機能障害とは、生活行為が適切に行えていない状態である。一般労働者の作業機能障害の存在率が約 40%であることに対し、医療者の作業機能障害の存在率は約 75%であると推計されている（三宅（2014））。そこで、医療者を対象に作業機能障害を調査すると、作業機能障害を体験している者はストレス反応、バーンアウト症候群、抑うつ状態が高い傾向にあることが示された（Teraoka（2015））。つまり、多くの医療者が健康管理上のリスクに曝されていると言える。そうした心理的問題は労働衛生上の重点課題であり、作業機能障害を改善する支援プログラムの構築が求められる。

申請者はこれまで、医療者の作業機能障害を改善するために、作業に根ざした実践 2.0（OBP2.0）という作業療法理論の体系化や、OBP2.0 を理論的背景とした CAOD という評価尺度の開発を行ってきた。さらに、医療者約 3000 名のデータを解析し、潜在ランク理論という統計モデルを活用し、作業機能障害の重症度を推定できるシステムを開発した。これによって、医療者の作業機能障害は専用の統計ソフトを使うと 5 段階で重症度を推定できるようになった。

しかし、従来の国内外の先行研究は、予防的作業療法において健常高齢者の作業機能障害を改善するために健康教育などの技術を整備してきたものの、医療者の作業機能障害の改善を支援するプログラムに関しては未整備であった。したがって、医療者の作業機能障害の改善に向けた支援プログラムを整備する必要があった。

２．研究の目的

本研究の目的は、医療者を対象に作業機能障害の重症度に応じたエビデンスに基づく作業機能障害支援プログラムを開発することであった。それにより、医療者が日々の生活の中でセルフヘルプしながら作業機能障害を改善するプログラムが実行でき、予防的作業療法の運用の可能性を広げることができると期待される。

３．研究の方法

手順１：エビデンスに基づく作業機能障害支援プログラムの構築

手順１では、エビデンスに基づく作業機能障害支援プログラムの構築を目的に、国内外の作業療法の介入プログラムに関連する先行研究の整理検討を行った。これは文献研究を行った。国内外の作業（仕事、遊び、レジャー、休息、睡眠、ADL、IADL、教育、社会参加）が健康、幸福、参加を促進するという前提で文献レビューを行った。また、レビューは作業を扱った幅広い領域で明らかになった先行研究を収集した。その結果、不適切な作業は死亡率、罹患率、再発率を高めることが明らかになった。作業を適切に行えていないと、身体の痛みを訴えたり、循環器系への悪影響を及ぼしたりするなど身体的健康と幸福にネガティブな作用をもたらすことがわかった。また、不適切な作業の中には、他者とともに作業をできない孤独、孤立なども含まれ、社会との接点を失った作業に従事していると社会的健康と幸福にも悪影響を示すことも明らかになった。反対に、作業機能障害の予防という観点から見ると、作業遂行の向上、作業との結びつきの改善、作業バランスの是正、物理的・社会的な環境調整等を行うことが有益であるとわかった。特に労働者の場合、仕事と休息のバランス、心身のコンディションに合わせた職務遂行、学習による知識と技術の刷新、レジャーを行うために仕事や家事などをサポートしてくれる周囲から

の協力体制の構築等があると明らかになった。これらの先行研究から、作業機能障害支援プログラムが作成できた。

手順２：エビデンスに基づく作業機能障害支援プログラムの有効性の検討

手順１を踏まえて、手順２では作業機能障害支援プログラムが機能するかの有効性の検討を行った。

（１）研究デザイン

本研究は、介入研究で行った。介入研究はシングルシステムデザインの ABA 法を用いた。

（２）参加者

参加者は、プレテストで医療者１名、本試験で医療者４名であった。作業機能障害に陥っていると予測されるものに研究協力を依頼した。また、研究協力の内諾が得られた時点で、作業機能障害の評価である CAOD に回答してもらい、カットオフ値以上の者を選定した。

（３）測定

測定は、ベースライン期、介入期、フォローアップ期で計 9 回（各期３回ずつ）行った。使用した尺度は、CAOD, GHQ-12、SRS-18 を面談の際に聴取した。

（４）データ解析

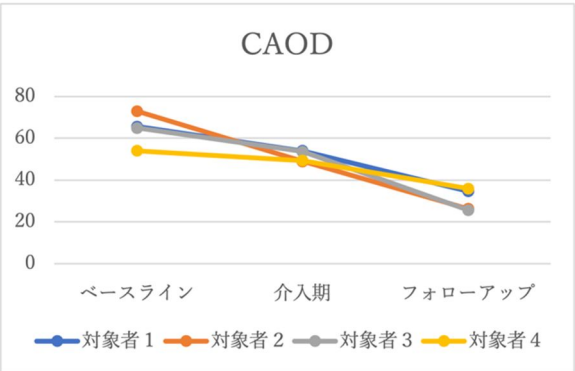
統計解析は、質的分析と量的分析を行った。質的分析では、面談の際の語りを逐語録にし、SCAT で分析した。量的分析では、基本情報の記述統計、CAOD、GHQ-12、SRS-18 の差の検定を行った。

４．研究成果

本研究を通して、手順１では医療者のエビデンスに基づく作業機能障害支援プログラムが作成できた。この支援プログラムは、周辺領域も含めた健康・幸福・参加に効果的な作業を国内外の先行研究より抽出しているため、様々な対象者の状態に適応できるような支援プログラムが作成できた。また、この支援プログラムは予防的作業療法で医療者がセルフヘルプできることを前提に作成されている。そのため、医療者は支援プログラムを読むことにより自身の生活に汎化できるよう組み立てられたプログラムが作成できた。

手順２では、作業機能障害支援プログラムを用いた有効性の検討が行えた。有効性の検討は、プレテストを行いプログラムの微修正を行った後に本試験へと移行しているため、プログラムの有効性が複数回確認できた。本試験では作業機能障害に陥っている医療者４名を対象に、６週間の作業機能障害支援プログラムが実行できた。結果として、４名とも CAOD の数値がベースラインとフォローアップで有意に下がり、作業機能障害の改善が得られた（$p < 0.05$）（表）。プレテストで懸念された研究参加の離脱や報告忘れに関しては、ビデオ視聴による再動機づけと日記の共有により防ぐことができた。

表　CAOD の数値の変化



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 寺岡睦	４．巻 29
２．論文標題 リハビリテーション職種が知っておくべき臨床統計　基礎から最新の話題まで　統計ソフトの種類	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Clinical Rehabilitation	６．最初と最後の頁 1251-1256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kyougoku Makoto、Teraoka Mutsumi	４．巻 73
２．論文標題 Bayesian Analysis of the Relationship Between Belief Conflict and Occupational Dysfunction	５．発行年 2019年
３．雑誌名 American Journal of Occupational Therapy	６．最初と最後の頁 1~9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5014/ajot.2019.027615	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Teraoka Mutsumi、Kyougoku Makoto	４．巻 64
２．論文標題 Structural relationships among occupational dysfunction, stress coping, and occupational participation for healthcare workers	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Work	６．最初と最後の頁 833～841
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3233/WOR-193045	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清家庸佑、京極真、寺岡睦	４．巻 6
２．論文標題 「作業機能障害の種類に関するスクリーニングツール」と精神障害者の健康状態および主観的状態との関連性の検討	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本臨床作業療法研究	６．最初と最後の頁 46－51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 後藤 紀史、寺岡 睦	4．巻 40
2．論文標題 回復期リハビリテーション病棟における「作業に根ざした実践2.0（OBP 2.0）」の臨床有用性について	5．発行年 2021年
3．雑誌名 作業療法	6．最初と最後の頁 691～698
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32178/jotr.40.5_691	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 草野 佑介、寺岡 睦、京極 真	4．巻 41
2．論文標題 後天性脳損傷児の通常学級への適応プロセスに関する保護者の経験の質的解明	5．発行年 2022年
3．雑誌名 作業療法	6．最初と最後の頁 41～50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32178/jotr.41.1_41	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　6件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 廣瀬卓哉、京極真、寺岡睦
2．発表標題 脳卒中の上肢機能訓練に関わる作業療法士が経験する信念対立の質的解明ー1事例による探索的検討ー
3．学会等名 日本作業療法学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 浦部智章、京極真、寺岡睦
2．発表標題 認知症クライエントに対する意志プロセス評価尺度の項目プールの作成
3．学会等名 日本作業療法学会
4．発表年 2020年

１．発表者名 清家庸佑、京極真、寺岡睦
２．発表標題 精神障害領域における作業機能障害の種類に関するスクリーニングツールの潜在ランク数の推定
３．学会等名 日本作業療法学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 桑原裕也、京極真、寺岡睦、森下元賀
２．発表標題 回復期リハビリテーション病棟入院患者1例による意欲に関する要因の質的分析
３．学会等名 大阪理学療法学術大会学会誌
４．発表年 2020年

１．発表者名 寺岡睦
２．発表標題 OBP2.0とCAODの実践について 作業に根ざした実践理論と作業機能障害の種類と評価
３．学会等名 神奈川県作業療法士会主催研修会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 寺岡睦
２．発表標題 OBP2.0の理論と実践
３．学会等名 奈良県作業療法士会主催研修会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 寺岡睦
２．発表標題 OBP2.0の基礎、OBP2.0の実践
３．学会等名 リハテックリンクス講習会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 清家庸佑、京極真、寺岡睦
２．発表標題 作業機能障害の種類に関するスクリーニングツールと主観的尺度の関連性の検討
３．学会等名 日本作業療法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 寺岡睦、京極真
２．発表標題 予防的作業療法のための作業機能障害支援プログラムの作成
３．学会等名 日本作業療法学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 中野里佳、寺岡睦、京極真
２．発表標題 作業的公正を目指す当事者運動に参加する過程および作業としての特徴に関する質的研究
３．学会等名 日本作業療法学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 野口卓也、京極真、寺岡睦
２．発表標題 ポジティブ作業評価（APO-15）における特異項目機能の検討
３．学会等名 日本作業療法学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 寺岡睦
２．発表標題 文献レビューの意義と方法
３．学会等名 鹿児島県作業療法士会学術部研修会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 寺岡睦
２．発表標題 研究が拓く作業療法
３．学会等名 第16回宮崎県作業療法学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 寺岡睦
２．発表標題 作業に根ざした実践2.0-OBP2.0入門-
３．学会等名 第25回福岡県作業療法学会（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 小川 真寛、藤本 一博、京極 真	４．発行年 2020年
２．出版社 メジカルビュー社	５．総ページ数 272
３．書名 5W1Hでわかりやすく学べる 作業療法理論の教科書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関